

第142回 日文研フォーラム



# 聖人伝、高僧伝と社会事業

—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—

Charity in Hagiographic Texts



ジョナサン・オーガスティン

Jonathan M. AUGUSTINE

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公開を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄





● テーマ ●

# 聖人伝、高僧伝と社会事業

—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—

## Charity in Hagiographic Texts

● 発表者 ●

ジョナサン・オーガスティン  
Jonathan M. AUGUSTINE

国際日本文化研究センター 外来研究員  
JSPS Research Fellow, Int'l Research Center for Japanese Studies



2001年9月18日 (火)

## 発表者紹介

ジョナサン・オーガスティン

Jonathan M. AUGUSTINE

国際日本文化研究センター外来研究員

JSPS Research Fellow, Int'l Research Center for Japanese Studies

## 略歴

- 2001年 3 月 Ph. D. (プリンストン大学)
- 1995年 9 月 中国湖北師範大学英米文化講師
- 1997年 2 月 プリンストン大学東洋学部講師
- 1998年10月 仏教大学文学部非常勤講師
- 1999年 4 月 龍谷大学文学部非常勤講師

## 著書・論文等

- ・“Kamono Chomei and the Foundations of Reclusive Ideals,” Princeton University Archives, 1995.
- ・「神話・伝説・昔話学の国際化」『世間話研究』第10号、2000年
- ・“Monks and Charitable Projects,” Japanese Religions No. 26, 2001.
- ・“The Politics of Charity,” Ph. D. dissertation, 2001.

## 「聖人」と「菩薩」の称号

聖人伝や高僧伝は中世に入って組織的に集められて以来、農民や商人から貴族階級の人々にまで親しまれてきた。ヨーロッパの「聖人」と同様に、日本でも奈良時代から「菩薩」や「菩薩僧」とよばれた人物がしばしば六国史や伝記のなかに登場する。しかし、菩薩と称された人物は、必ずしも社会事業に貢献しているとは言いきれない。この論文でとりあげる高僧伝は、江戸初期の『本朝高僧伝』のような書籍だけではなく、もっと広い意味で、民衆から高僧として崇拜されていた人物をとりあつた伝記である。このように、社会事業の観点から聖人伝と高僧伝を比較すると、全く異なった文化の間にも、偶然とは思えないような共通点があるように思われる。

ヨーロッパの聖人伝の殆どは脚色された大げさな伝記からなりたっているため、多くの歴史学者は研究対象にならないと言っている。ここで考えたいのは歴史的事実ではなく、聖人伝の誇張やレトリックが当時の価値観や世界観をどのように反映しているかである。今日において、伝記というものは主人公の短所をも叙述することが要求されるが、大部分の聖人伝は信者の奇跡に焦点をしぼり、聖人同士の違いが殆ど見られないことが多くなっている。十二、三世紀になると聖人伝は修道院のミサの中で朗読されるように

なり、命日や誕生日になると特別な儀式が行われた。また、日本の往生伝や高僧伝と同じように、ヨーロッパの聖人伝も、読んだり聞いたりすることによって、功德が得られると信じられていた。

古代、中世ヨーロッパの聖人伝について言える事は、描写されている聖人が必ずと言っていい程、なんらかのかたちで社会福祉に携わっていることである。秀でたキリスト教徒が聖人の称号を与えられるには、ローマ法王の正式な認知が必要であったが、一般的には地元の信仰者が長旅をして、司祭か他の高官にその聖人が行った善行について報告することが必要であった。十三世紀になるとヨーロッパ中の小さな町や村落などで、福祉活動に力を注いだり、奇跡を起こしたりする者を「聖人」と讃え始めた。しかし、イノセント三世（一一六〇—一二一六）はこういった動きが、曖昧な聖人をたくさん作りだすと考え、法王だけが中央主権的に聖人を選択することができるよう新たな法律を定めた。

日本の場合、菩薩の称号を制限するメカニズムが存在しなかったせいか、文献の中には幅広い人々が菩薩と讃えられている。鑑真とともに唐から来朝してきた中国僧、思託は聖徳太子の生涯を上宮皇太子菩薩伝に記し、現存する日本最古の僧伝集である『延暦僧録』には二十四名の伝記が記述されている。残念ながら、その伝記は散逸してしまっ

たが、現存する目次には、上宮皇太子菩薩、近江天皇菩薩、行基菩薩、勝宝感神聖武皇帝菩薩、天平仁正皇后菩薩、沙門釈浄三菩薩、長岡天皇菩薩、感瑞広祥皇后菩薩、広智菩薩などといった多くの人々が菩薩の称号を与えられている。この目録が興味深いのは、聖徳太子、天智、聖武、桓武天皇、光明皇后、乙牟漏皇后といった俗人である皇族が菩薩と呼ばれていることである。確かに、聖武天皇や光明皇后は布施屋や施薬院などの福祉施設の建設にかかわっているので、敬虔な仏教徒として菩薩と称されてもおかしくない。又、行基菩薩のように朝廷から正式に与えられた尊称を記述している書籍も存在する<sup>1</sup>。

日本で菩薩が社会事業と関連づけられるのは、行基の長年における布施屋などの建設であるが、その化身としてまつられてきた文殊菩薩への信仰は、平安初期に日本全土に浸透していたようである。大安寺の勤操が創始した文殊会では経典を読むばかりではなく、地元の農民や官吏も文殊菩薩の教えをまっとうするために穀物を寄付したと元亨釈書に記されている。天長五年（八二八）二月二十五日の官符によれば、勤操が死欠した後、泰善という僧が文殊会の存続を望み、僧網も全国でこの会が行えるように申し出たと『類聚三代格』に記述されている<sup>2</sup>。

日本の菩薩号の特色は、神仏習合思想を受けて、七八一年に八幡神宮に八幡大菩薩の

称号を奉進していることである。そもそも菩薩号というものは、歴史上の人物だけではなく、文殊、普賢、観音菩薩のように智慧や慈悲をつかさどる守護神として扱われている。初期キリスト教で、このような役目を果たしたのは、新約聖書に登場するガブリエルなどの天使たちであろう。民衆に親しまれてきた聖人も、天地の仲裁者の立場を担っている、神学者の間で考えられていたようだが、守護神というよりは、民衆と同じ立場におかれた人物として描かれている。

そして、平安末期から鎌倉時代にかけて、律宗を再建した高僧には、朝廷から菩薩号がおくられることが度々あった。後醍醐天皇は覚盛（一一九四—一二四九）に大悲菩薩の称号を授与し、忍性（一二一七—一三〇三）を忍性菩薩と呼んでいる。そして、後伏見天皇は叡尊（一二〇一—一二九〇）を興正菩薩と称している。この点では、中世のローマ法王が、候補者を聖徒の列に加えることと似ているが、日本では高僧を選出したり、評価したりする複雑なプロセスは存在しなかった。

日本最初の仏教通史である『元亨釈書』（一三三二年「元亨二」）は、仏教伝来から鎌倉時代末までの、約七百年間にわたる高僧の伝記や史実を記録した極めて重要な資料である。虎関師錬は序章に梁や唐の高僧伝に倣って『元亨釈書』を編纂したと記しているが、四百人あまりの僧伝の中で、わずか四人だけが菩薩号の称号で呼ばれている。しか

も、その四人は、叡尊を除くと、全て奈良時代の僧や皇族であることが伺われる。虎関師錬は高僧に対して、個人的な評価を加えたというよりも、前例に倣って菩薩と記していたようである。更に戦国や江戸時代になると、禪師号、国師号、大師号といった称号が頻繁に高僧に授けられたようであるが、菩薩号は高僧伝の中で殆ど使われなくなった。

### 「貧困者」とキリスト教

こうして考えてみると、ヨーロッパの聖人伝は最初から社会事業と密接なつながりがあったようである。そもそもキリスト教では「貧困者」が大事な役割をはたしており、聖人にとって彼等はなくしてはならない存在であった。最近「貧困を一掃する」とか「貧困にうちひしがれた人々を助ける」といったスローガンが、世界の政治家の間で頻繁に用いられるようになったが、「貧困」という概念は曖昧なもので、容易に定義できない。「富」は数えることができて、「貧困」を量ることはできない。特にいわゆる「先進国」と「発展途上国」の間には、二十一世紀に入っても生活水準に大きな差異があるため、「貧困者」というのは、なおさら分かりにくくなってきた。

一般的に現代人にとって「貧困者」という言葉は、住居、仕事、財産を失った人々の

ことを指すが、古代の日本やヨーロッパの社会にはかなり違った基準が存在していた。金銭がまだ広く使われていない時代には、「貧困」というのは「富」や「財産」ばかりではなく、社会的地位の最も低い人々を指していたのかもしれない。

古代、中世ヨーロッパのキリスト教信者にとって「貧困者」は侮辱や虐待の対象ばかりではなく、崇拜の対象でもあった。町人文化が栄え始めると、「貧困者」はもともと身近な存在になり、文学作品のなかにも度々登場するようになった。読み書きできる人口が増えていく中で、聖書はもともと重要な位置をしめていた。特に新約聖書は、民衆の生活の中で絶対的な役割を果たしている。その福音書が「富者」と「貧困者」を両極として扱っていることから、「貧困者」というカテゴリーが、現代の西洋人によって作られられたものではないことが分かる。

例えば、ルカの福音書六・二五の中で、イエスは本格的な説法を始める前に十二人の弟子を山上に集め八福について説いた。その第一福にイエスは、「貧しい者は幸いである。神の国はあなたがたのもの」と語っている。この「貧しい者」が、具体的に誰を指しているかは、明確ではない。けれども同じ福音書の中でイエスは、「金持ち」と「貧困者」のたとえ話を語っている。ルカの福音書一七・一九―三一を概要すれば、あるお金持ちの屋敷の門の前で、ラザロという貧困者が毎日横たわっていた。お金持ちはラザ



口をかまっていられなかったため、地獄に落ちてしまった。お金持ちはラザロが天国でアブラハムの側にいるのを見て、地獄から助けを求めた。しかしアブラハムは、そのお金持ちの前世の生きかたを咎め、地獄で罰を受けるしかないと言った。興味深いことに、「貧困者」に対しては、ラザロという名前がつかわれているものの、「お金持ち」には特定の名前が与えられていない。しかも、ルカのたとえ話の中でラザロだけが名前のある登場人物となっている。このラザロは、中世のヨーロッパの絵画の中で頻繁に取り扱われ、聖人として崇拜されている。

イエス自身の活動も、様々な「貧困者」の為に奉げられていることは言うまでもない。ルカの福音書は、イエスがユダヤ地区の様々な町を訪れながら、ハンセン病患者、手足の不自由な者、悪霊にとりつかれた者の苦しみをも癒したと伝えている。その社会事業の範囲は、あまりにも広く民衆の注目をあびたため、最終的には権力者の反感を買うことになった。恐らくユダヤ人の司祭にとってイエスは、従来の価値観をひっくりかえす危険な人物だったのだろう。

ラテン語で「貧困者」の意味を持ちえる言葉は豊富に存在する。Insufficiens, mendicus (乞食) famelicus (空腹の) nudus (裸の) miserabilis (悲惨な) pannosus (粗末な装いの) などは物質的欠乏を指すが、omnes という語は弱者や身分の低い人を指し

ていた。更に十五世紀になるとイタリアでは、「貧困者」を「尊敬すべき者」と「価値のない者」に区別する神学者も現れた。Francisco de Vitoria（一四八〇—一五四六）は Summa Theologia の注釈書の中で「貧困とは苦しみの生活をおくることなく、必要な最低限のものをそなえ律儀に生きることを目指す」と説明している。<sup>3</sup> 大規模な不況の真っ最中だったイタリアでは恐らく「貧困者」をいくつものカテゴリーに分ける必要があったのかもしれない。キリスト教が普及して以来、未亡人、孤児、病人は「いたわるべき貧困者」としてとらえられてきた。これらの人々は新約聖書の福音書の中で慈しまれ、賞讃されてきており、古代、中世ヨーロッパの信者にとっても特別扱いされている例も少なくはない。中世に入ると貧困者は様々な修道士の援助を受け、団結して労働組合のようなものを構えるようになった。十五世紀にはストラウスブルグ、バゼル、フランクフルトなどで、かなり大規模な施設が足の不自由な者とハンセン病患者などの間で設けられ、大多数は城下町の外で労働者を集めていた。<sup>4</sup>

しかし、他の「貧困者」は、蔑まれることさえあった。典型的なイタリアの一五世紀の寓話を取り上げてみれば、「貧困者」の中には働けるのに貧しく偽るものが出て、町の広場で倒れては人から金銭を騙し取って生活していると考えられていたようである。オーグスバーグに住んでいた有名な浮浪者は、ある時死んだふりをして、葬儀のお

金を町の者に寄付してもらった。しかし事実が役人にもれると、彼は即座に首吊りの刑にされたと伝説は語っている。この他にも「貧困者」であることを利用して怠惰な生活をおくった逸話は極めて多い。

ジャック・デヴィトリ（一一六〇—一二四〇）というイタリアの神父は、興味深い説法の中で仕事ぎらいの貧困者についての寓話を残している。その話を要約すると、ある日町中で足の不自由な貧しい男と盲目の男が気軽に話をしていた。すると、急に聖マーティンの葬列が現れ、二人はその中に巻き込まれてしまった。聖マーティンの霊的能力の噂を聞いていた二人は焦って、「大変だ。もし彼の聖体にふれてしまえば、病はたちまち治ってしまい、一生働かなければならない」と叫んだ。葬列が過ぎ去った後、彼らの病は治ってしまったという結末である。このように、聖人の遺体や遺骨に関する信仰は中世になると幾つもの聖人伝にまとめられた。

そもそも「貧困者」という言葉は農民や労働者を指す場合も多かったと、カータ・リンドバーグは説明している<sup>6</sup>。封建社会の中で農民は無力で、騎士や王の保護が必要だと考えられていた。そのせいか、*agricola*や*laborator*は軽蔑されることが多かった。中世イタリアの社会において、農民はもっとも低い身分にあつたものの、自ら貧しい生活をおくる者は崇拜されていたようである。俗生活を捨てて修道士になるには、いくつもの

誓いを立てなければならなかった。その中でもっとも重要な誓約は、貧困、純潔（性的禁欲）、忠順だった。ここで詳しい説明をばくが、貧困の理想をつらぬいた修道士は、pauper Christi（キリストの貧困者）と称された。しかし、イタリアの各地では内乱が起こつていたため、ベネディクト会の修道士は自給自足の修道院を建て、外部の混乱から逃れようとしていた。<sup>7</sup> 修道院はキリスト教の教えをまっとうするための祈りと修行の場と考えられていたようであるが、十三、四世紀になると修道院の中には裕福な院も現れ、元来の意味も失われつつあった。無論このような傾向は、日本の禪宗の中でも見られるのではないだろうか。祈りと瞑想は、キリスト教と仏教の思想の中でもっとも重要な要素ではあるが、社会との接触を切つて専念すると危険な執着になりうることは様々な伝説や説話の中でみられる。アッシジの聖フランシスコもこの傾向を実感していたのかもしれない。彼が十三世紀に呼び起こした改革運動は、修道士と民衆の共存を求めるもので、町を中心に活動した。金銭の流通と長距離貿易の繁栄を伴い、裕福な商人は増えていた。しかし、イタリアの教会は依然として商人に対して批判的な姿勢を崩さず、レスター・リトルは商人の中には、自分の富に対して罪悪感を抱いていた者も多き<sup>8</sup>と考えている。しかしフランシスコは商人を責めず、何らかの形で貧困者に食料や衣服を恵むことで、功德を得ることができると説いた。その為アッシジのフランシスコは後

の世に商人を守る聖人とされている。

商人はキリストが述べたように、全ての財産を捨てて神の教えを守ることができなくても、食料を「貧困者」に施すことによって罪をあがなうことができた。十二、三世紀イタリアの説教の中には、「貧困者」への施し物は、死後天国で神から授けられるという話がよくみられる。特に裕福な商人の葬儀では、財産の何割かを「貧困者」に施すという遺書さえ残っている。現代人にとって、「貧困者」への施し物によって、天国でも裕福な暮らしができるという考えは、福音書の教えといささか矛盾が感じられるが、中世の神学的立場から見れば納得できたのかもしれない。このようにして中世イタリアの修道士、司祭、司教は「富者」と「貧困者」を結びつけ、お互い不可欠な存在に作りあげた。

### 社会福祉の聖人

さて、社会福祉の聖人として崇拜された人々は、地元の信仰者たちの中にとけこみ、村落や町を活動範囲とした。ベンカサの十二世紀の聖人伝に登場する聖ライネリウス（?—1160）は、裕福な商人の子として生まれ、優秀な成績で大学を卒業した。そ

の後彼は、父の商売を継ぐことになっていたが、氣が進まずエルサレムに巡礼することを決意した。十三年の年月が過ぎた後、彼はようやくピサの町へもどり、様々な福祉施設を建てることに携わった。数十年後ピサの民衆は彼の死をいたわり、社会福祉の聖人としてまつりあげた。ある注釈書によれば、彼はアレキサンダー三世によって聖人の列に加えられた。ピサには他にもこういった福祉の聖人たちが活動していた。聖ウバルデスカは女性の聖人として当時の民衆に親しまれていた。田舎からピサへ流れてきた彼女は、聖ヨハネ・エルサレム病院のシスターとして任命され、物乞いをしながら病人の介護に生涯をささげたと語り継がれている。ウバルデスカの死後、彼女はエルサレムの病人を見守る聖人として崇拜された。

社会福祉の聖人はたまに政治的運動を呼び起こし、教会の不正を指摘する者さえいた。特に、ピアツェンザの聖レイモンド・パルメリオはエルサレムへの巡礼から戻った後、様々な都会の社会問題に積極的に取り組んだ。彼は年々増加していた売春、貧困、法廷の汚職問題の深刻さを訴え、東ロンバルディの司教をも批判した。地方の豪族の支持をえて、教会の権威者を攻撃しながらも、民衆に崇拜され続けたことは、聖パルメリオのカリスマ性を物語っている。聖パルメリオは社会福祉の聖人として讃えられているものの、一三世紀の聖人伝の中で、闘争的な聖人というカテゴリーに属している。即ち正統

的な聖人伝の中にも、教会の墮落や不正を訴える余地はあつたようである。

聖人伝が教会から正式に承認された礼拝文学になつてから、社会福祉の聖人は、一般的に職人といった卑しい身分の者として描写されている。聖パルメリオは若い頃、靴職人として働き、聖デオグナは酒職人として労働し、聖ファシオ・デ・クレモナは金細工師として知られていた。しかし、職人は教会からもっとも卑しい社会層として軽蔑されており、殆どの聖人伝の中で主人公は日常生活に戸惑いを感じ、職人をやめる類型が見られる。聖パルメリオやホモノブスも職人をやめて長期の巡礼に出かけた。一方聖ファシオ・デ・クレモナは金細工師をやめることはなかったが、彼がつくつた十字架や盃は貧しい地元の教会に配られたと伝えられている。

聖人伝の多くは地元の司祭によって記述されてきたが、十三世紀以降は中央主権の厳しい審査が加えられたため、カルト的な要素をはぶかなければならなかった。そのせいか、もっとも顕著な聖人伝は、その聖人とまったく関係のない人物によって書かれている。やはり、古代の聖人伝はラテン語でまとめられていたが、中世に入ると口語的で一般の信者を対象に記されることが多くなった。ローマ教会は、聖人伝を統一しようとする一方、庶民に分かる言葉で紹介しようとしていたようである。

最後に、日本もイタリアも中世に入ると、福祉活動に携わつた聖人の社会的地位を实

際よりも高く見せる傾向が見られる。十四、五世紀のイタリアの聖人伝も若い頃、職人として活躍した紹介の部分を軽視したり、はぶいたりすることによって、後世に上流階級の聖人として見せつけることができた。日本でも行基の例を取り上げてみると、八世紀の『大僧正舎利瓶記』などでは行基の祖先を百済系の帰化人と記しているが、十四世紀になると『行基縁起図絵詞』のように行基の先祖を、中国の漢高祖（前二四七―前一九五）や応神天皇の時に来日し『論語』十卷『千字文』一卷を献上した王仁と結びつける僧伝も増えていた。リチャード・キーキヘファは聖人というものは、時代が過ぎていくとともに民衆と社会的距離を増していくものであると断言している。確かに後世の信者にとって聖人は手の届かない存在であつたかもしれないが、聖人伝の中で彼等は身近な人としても描写されている。天地の仲裁者として信仰されてきた福祉の聖人は今日においても複雑な存在である。

## 注

- 1 田村晃祐「律宗の菩薩」金岡秀友編『大乘菩薩の世界』（佼成出版社、昭和六十三年）332―333。

- 2 吉田靖雄『日本古代の菩薩と民衆』（吉川弘文館、昭和六十三年）246。



- 3 Richard C. Trexler, "Charity and the Defense of Urban Elites in the Italian Communes," in Frederic C. Jaher, ed., *The Rich, the Well Born, and the Powerful*. (Urbana: University of Illinois Press, 1973), 71-73.
- 4 Carter Lindberg, *Beyond Charity: Reformation Initiatives for the Poor*. (Minneapolis: Fortress Press, 1993), 44-45.
- 5 Marshall Baldwin, ed., *Christianity through the Thirteenth Century*. (New York: Harper & Row, 1970), 396.
- 6 Lindberg 1993: 21.
- 7 Michel Mollat, "The Poor in the Middle Ages," in Thomas Riis, ed., *Aspects of Poverty in Early Modern Europe*. Vol. 1. (Stuttgart: Klett-Cotta, 1981), 44-47.
- 8 Lester Little, "Pride Goes before Avarice: Social Change and the Vices of Latin Christendom," *American Historical Review* 76/1 (1971): 38.
- 9 Lester Little, *Liberty, Charity, Fraternity: Confraternities at Bergamo in the Age of the Commune*. (Northampton Mass., Smith College, 1988), 97.

## 発表を終えて

この度は、国際日本文化研究センターにこのような機会をあたえていただき、大変ありがたく思います。大ざっぱな課題ではありましたが、比較民俗学の研究を行ううえで、皆様の貴重なご意見を伺うことができました。頼富先生をはじめ、大勢の方にご指導、ご協力していただき、心からお礼申し上げます。

A handwritten signature in cursive script, reading "Jonathan Duggan". The signature is written in black ink and is positioned centrally below the main text block.

日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者・テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA (ピサ大学助教授) 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORIβEN (日文研客員助教授) 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン Lee A. THOMPSON (大阪大学助手) 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライーニ Fosco MARAINI (日文研客員教授) 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14	SONG Whi Chil 宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART (ウィーン大学教授) 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11	スーザン J. ネイピア Susan J. NAPIER (テキサス大学助教授) 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ C. ドビンス James C. DOBBINS (オベリン大学助教授) 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN An Sheng 嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU Jingwen 劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY (オベリン大学助教授) 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HISLA Gang 夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント Ernst LOKOWANDT (東洋大学助教授) 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモン Hartmut O. ROTERMUND (フランス国立高等研究院教授) 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT (ミネソタ大学助教授) 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET (フランス国立科学研究所助教授) 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES (インディアナ大学準教授) 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER (筑波大学哲学思想学系外国人教師) 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN (カンザス大学教授・日文研客員教授) 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET (ミネソタ州立大学助教授) 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10	Li Guodong 李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉓	2. 9.11	MA Xing-guo 馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) 「正月の風俗—中国と日本」
㉔	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT (リーハイ大学助教授) 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATHY (カイロ大学講師) 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウィーペ P. カウテルト Wybe P. KUITERT (ワーゲニンゲン大学研究員) 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
③①	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT (フンボルト大学教授・日文研客員教授) 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
③⑤	3. 9.10	ドナルド M. シーキンズ Donald M. SEEKINS (琉球大学助教授) 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

③⑧	3.12.10 (1991)	HONG YoonSik 洪 潤植 (東国大学校教授) 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サ ウ イ ト リ ・ ウ イ シ ュ ワ ナ タ ン Savitri VISHWANATHAN (デリー大学教授・日文研客員教授) 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジャン=ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS (フランス国立東洋言語文化研究所教授) 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14	リブシェ・ボハフチコヴァー Libuše BOHÁČKOVÁ (プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授) 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McCARTHY (駿河台大学教授) 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G. カ メ ロ ン ・ ハ ー ス ト Ⅲ G. Cameron HURST Ⅲ (ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長) 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本 良夫 (ラトロープ大学教授) 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8	WANG Yong 王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授) 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13	LEE Young Gu 李 榮九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10	ウィリアム D. ジョンストン William D. JOHNSTON (ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8	マノジュ L. シュレスト Manoj L. SHRESTHA (甲南大学経営学部講師) 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐる—」

④9	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT (プリンストン大学教授・日文研客員教授) 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
⑤1	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水 義明 (プリンストン大学マーカンド荣誉教授) 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13	KIM Choon Mie 金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA (ハワイ大学教授) 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) 「変革と選択: 10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐる—」
⑤5	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA (ソフィア大学教授・日文研客員教授) 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) 「和算と韓算を通して見た日韓文化比較」
⑤7	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILCINSKI (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN (ミシガン州立大学連合日本センター所長) 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12	リチャード・トランス Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10	シルバーノ D. マヒウオ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉 建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ J. クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACÉ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥⑧	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦⑩	7. 1.10 (1995)	ミハイル V. ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦①	7. 2.14	YAN Shao Dang 嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」



72	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王 家驊 (南開大学教授・日文研客員教授) 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
73	7. 4.11	アリソン・ト キ タ Alison TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
74	7. 5. 9	リュドミラ・エルマコワ Lioudmila ERMAKOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER (日文研客員助教授) 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kil-Sung 崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) 「『恨』の日韓比較の一考察」
77	7. 9.26	SU Dechang 蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) 「日中の敬語表現」
78	7.10.17	LI Jun Yang 李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サ モ ニ デ ス William SAMONIDES (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19	タチヤーナ L. ソ コ ロ ワ デ リ ユ シ ナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA (翻訳家・日文研来訪研究員) 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
82	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER (神戸大学国際文化学部外国人教師) 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

84	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
85	8. 5.28	マーク・コウディ・ポールトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
86	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Sylvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチョウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
89	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王 秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王 宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳 生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシエリヤコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
94	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・F. マルラ Michele F. MARRA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授) 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 パークレー仏教研究所準教授) 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10	ヤン・シ・コラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	キンヤ・TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT (龍谷大学助教授) 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーゼン Theodore William GOOSSEN (ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11	KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) Livvia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シ・コラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) キンヤ・TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩4	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才——語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ・A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に——金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9	Hiroshi SHIMIZU 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」
⑩9	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ——詩的イメージとしての典故——」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪1	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』——安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪2	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化——芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪4	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて——宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑪⑩	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑪⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロバール Jean-Noel A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑪⑫	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑪⑬	11.12.14	X. Jie YANG 楊 暁捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

125	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
126	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ マリア・トレューン ハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
128	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
130	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
132	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンス Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か?」
⑬⑧	13. 4.10	Li Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
142	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における「近親婚」と中国の「同姓不婚」との比較」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>





\*\*\*\*\*

発行日 2001年12月25日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075)335-2048  
ホームページ: <http://www.nichibun.ac.jp>

\*\*\*\*\*

© 2001 国際日本文化研究センター





■ 日時

2001年 9 月18日 (火)

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

